

フィールドワーク 心得帖

インタビューの作法

私はこれまで、インタビュー中心のフィールドワークを行ってきた。役人、企業家、商人、労働者、農民、学者など、様々な人にインタビューをした。未だに満足できるインタビューができることは少ないが、それでもいくつかの「心得」を学んだように思う。ここでは自身の経験に基づいて、何点かを紹介したい。

●情報の真偽

第一に、情報の真偽を確かめることの大切さである。当然のことながら、インタビューで聞いた情報が、常に正しいとは限らない。インタビューした相手が十分な知識を持っていないかったり、勘違いしていたりするために、間違った情報が告げられる場合もある。しかし、より困るのは、相手が意図的に事実と異なることを述べる場合である。とくに、私が対象としているミャンマーでは人々が自由に発言できない場面も多く、インタビューで正しい情報を聞き出すのは簡単ではない。

ひとつの事例を紹介しよう。少し前にミャンマーとタイの国境貿易を視察するために、研究所の同僚数人でミャワディという町を訪れた。我々はミャワディ国境貿易局の部長とミャワディ国境商工会議所の会頭に面談した。その際、国境貿易の管理・促進において問題点はなにかと尋ねたところ、二人とも密

輸の横行が最大の頭痛の種であると答えた。確かに、この周辺の国境線は小さな川に過ぎず、正式な国境ゲートを通らずとも物資の運搬は容易である。密輸の横行は事実であろう。

しかし、彼らがそれで困っているというのではない。なぜなら彼ら自身が密輸に関わっているからである。私はインタビューの後、国境商工会議所の会頭の車に同乗させてもらったが、会頭にはひっきりなしに商談の電話がかかってくる。ヤンゴンのインスタント・コーヒーの大手メーカーからは、タイの砂糖の注文が入っていた。本来、ミャンマーでは国境貿易による砂糖の輸入は禁止されているはずなのだが、商談はすぐに成立した。私がこの点を指摘しても、会頭は全く意に介さず、それどころか私をヤンゴン在住と勘違いし「欲しいものがあれば何でも言うて欲しい。すぐにヤンゴンへ送ることのセールズ・トークさえ展開されたのであ

る。つい先程、皆の前で密輸に頭を悩ませていると言っていたのが冗談のようである。

さらに、タイ側のメーソットへ渡って密輸ポイントへ行ってみると、そこでは白昼堂々、多くのミャンマー人労働者がプラスチック容器に入ったパーム油をトラックから降ろして、ボートへと運んでいた。これもまた規制品である。ボートはすぐ対岸のミャワディ側へと漕がれて行き、積荷は、ここでも白昼堂々待機しているトラックへ搬入される。これらのパーム油は正式な国境ゲートを通ることなく、ミャンマー国内へと運ばれていく。じつはここは少数民族勢力が影響力をもつ密輸ポイントであるのだが、それにしてもミャンマー政府の黙認がなければこのようなルートは成り立たない。このように、インタビューでは情報提供者の言葉を鵜呑みにしてはいけないことがある。

●相手の立場

第二に、インタビューや視察を行う際には相手の立場を慮ることが大切である。ここでもひとつ事例を紹介しよう。

昨年、バングラデシュのミャンマーとの国境の町コックスバザールにあるロヒンギャ難民キャンプを訪ねた。ここでは

ミャンマー軍政の迫害を恐れて帰還できない約三万人の難民が暮らしていた。この時、私はバングラデシュ政府からの正式な許可を得られていなかったが、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コックスバザール事務所の好意により、この内ひとつの難民キャンプを視察する機会を得た。この難民キャンプには、国際社会の支援が比較的良好に行き届いており、生活・衛生環境は悪くなかった。

しかし、本当に苦しい立場に置かれていたのは、じつは二つの公式キャンプの外側に住み、バングラデシュ政府から難民と認められず、そのためUNHCRをはじめとする国際機関からも支援を得られない、非公式キャンプのロヒンギャの人々であった。彼らの生活環境は劣悪であった（写真）。

非公式キャンプは公式キャンプに隣接している。実際、私は公式キャンプを視察している時に、小高い丘の上から少し先に見える掘っ立て小屋の集落の存在を不思議に思った記憶がある。それは非公式キャンプに他ならなかったのだが、UNHCRのスタッフはそこへは案内してくれなかった。

翌日、非公式キャンプに私を案内してくれたのは、たまたま

専門はミャンマー地域研究。編著に『ミャンマー経済の実像—なぜ軍政は生き残れたのか—』（アジ研選書No.12、2008年）、『大メコン圏経済協力—実現する3つの経済回廊—』（情勢分析レポートNo.4、2007年）がある。



コックスバザール地区南クトゥパロンの非公式キャンプ（2009年10月16日、筆者撮影）

コックスバザールへ行く飛行機で知り合った国際NGOのスタッフであった。ロヒンギャ難民の現状を知るためには、非公式キャンプを見ることが不可欠であるにもかかわらず、なぜUNHCRのスタッフはそこを敢えて見せなかったのであろうか。

それは、バングラデシュ政府の政策に従って活動しているUNHCRの立場が関係している。バングラデシュ政府はロヒンギャ難民の流入を嫌っており、一九九三年以降は一人も難民認定をしていない。非公式キャンプの人々は「自然発生的な定住者」と呼ばれ、国際的な保護の対象となる難民とは認定されていない。

そのため、バングラデシュ政府との合意に基づき活動しているUNHCRは、非公式キャンプを外国人に見せる立場にない。いや、そのようなことをすればバングラデシュ政府との関係を悪くしかねないのである。私を非公式キャンプに案内してくれた国際NGOのスタッフは、UNHCRのこうした方針を批判していたが、少なくとも現場の事務所の判断で、外国人を非公式キャンプへ案内するわけにはいかなかったのである。

さて、私が非公式キャンプを

訪問したことは、その日のうちにUNHCRコックスバザール事務所にも報告されており、担当官からやりわりと釘を刺されてしまった。非公式キャンプを見なければロヒンギャ難民の現状は分からないから、UNHCRの意に反してもこれを訪問したのは致し方ないことであった。しかし、バングラデシュ、ミャンマー両政府と微妙な交渉を重ねているUNHCRの立場を理解し、尊重することも大切なのである。

●迷惑をかけつつ

第三に、なるべく相手に迷惑をかけないことが大切である。しかし、実際にはこれはかなり難しい。どの国でも現地の人々に多かれ少なかれ迷惑をかけるには、フィールドワークはできない。とくにミャンマーのような国で調査をすると、時に計り知れない迷惑をかけてしまうことがある。

例えば、ミャンマーである村へ行き、何人かの農民にインタビューしたいと当局に申し入れたらとしよう。この場合、農民が数十人は集められているのが普通である。村総出という時もある。しかも、こちらはといえば、道路状況が悪かったり、途中で車が故障したりして、村への到

着時間が遅れがちである。だから少し余裕をみてお願いはするが、それでも数時間も遅れることがある。そんな時、集められた多くの農民は農作業をすることもできずに、じつと村の集会所で待たされることになる。申し訳ないことこの上ない。

我々の訪問が、大ごとになってしまうこともある。つい最近もある地方の港のプロジェクトを視察に行ったところ、インフォーマルにアポイントをお願いしたにもかかわらず、結局は軍管区司令官まで話が上がり、政府の各役所（内務省、警察、農業灌漑省、運輸省、林業省など）が総出で我々を出迎えてくれることになってしまった。

我々が知らずに、迷惑をかけていることもある。ミャンマーでは地方に行くと、車が不足している。そのため、国軍・中央政府の偉い人や、我々のような外国人が訪問する時、地方の政府機関が民間人の所有している車を徴用することがある。しかも、ガソリン代までオーナー持ち、運転手がいない場合はオーナーが自分で運転することもある。地方の政府機関が用意してくれた車で、ものすごく不機嫌な運転手がいたら、それはチャョーカー（徴用された車）に違いない。政府の役人はもとよ

り、運転手も徴用されていることを外国人には言わないので、お金を支払うことも出来ない。知らない間に、大変な迷惑をかけてしまう。

●どう発表するか

第四に、得られた情報をどのようにに発表するか、その仕方が大切である。先に指摘したように、情報提供者はしばしば建前や虚偽の内容を話すが、彼らが本当のことを語らないのには理由がある。だから、隠されていた情報を知ったとしても、これを公表することは情報提供者の立場を悪くする可能性がある。

例えば、私がコックスバザールの非公式キャンプの現状をどこかで発表することで（これは既に多くの人が知っていることではあるが）、UNHCRの現場の担当者の立場を悪くしてしまうかも知れない。それでは、わたしを公式難民キャンプへ案内してくれたUNHCR担当者への裏切りとなってしまふ。

結局、ようやく聞き出した本当の情報は、再びオブラートに包まれた文章になって発表されることも多いのである。

それでも、様々な人との出会いとインタビュは、フィールドワークの醍醐味である。